

目的 現在法衣の縫製は各国とも法衣店でミシンで作製されているが，ミシン導入以前の「手縫い」の技法を調査し解明した。又法衣製作の実態を報告する。

方法 中国において祖父の代より法衣の縫製業を営んだ人から，手縫いについての聴取り調査，及び実技調査をした。又韓国通度寺において縫製の実態を調べた。

結果 法衣の縫製は，最初は僧自身の手で縫われたものであるが，次第に信者の婦人達の奉仕となり，更に法衣専門店に縫わせる様になった。

中国の法衣は 1 跑馬針 2 倒針 3 縫針 の三つの技縫により縫う。各部位の縫い方にも一定のきまりがあった。法衣を縫う人は，「大領」と呼ばれ，半僧の資格，待遇を受けた。韓国通度寺においては，10年に一度位信者の婦人達が寺に集り，袈裟を縫う行事袈裟供養が行なわれている。

日本，韓国，中国，ビルマ等では，袈裟は「半返し縫い」の技法を用いている。日本では条の部分，開葉，馬齒縫と呼ぶ刺し縫をしたが，韓国では同じものを通仏門と呼ぶ。中国では九条袈裟に「花衣」と云うものがあり，松，竹，梅，蘭等の花模様の刺繡をする。韓国では，仏像を刺繡したものがあった。僧の三衣に最も近いインドのサリーは，現在も無縫製衣であるが，法衣は縫うことにより宗団の標識とし意義づけをしたものとする。